

# 牢獄の花嫁

隠密七生記

春秋編笠ぶし

一領具足組

# 吉川英治全集

## 第8卷

編纂委員

---

川口松太郎

川端 康成

小泉 信三

小林 秀雄

佐佐木茂索

獅子 文六

---

講談社版

著作権者の了解  
により検印廃止

吉川英治全集・8 牢獄の花嫁 隠密七生記

春秋編笠ぶし 一領具足組

著者 吉川英治

装幀者 杉本健吉

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二番二号(大代表)  
電話東京九四二局二二二〇  
振替東京三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大製株式会社  
本文用紙 日本パルプ工業株式会社特漉

第一刷発行 昭和四十四年四月二十日

定価 六百八十円

© 一九六九年 吉川文子

目次

牢獄の花嫁

一

隠密七生記

一七三

春秋編笠ぶし

三〇五

一領具足組

三六七

牢獄の花嫁



幸 福 人

あの座敷に寝ころんで見たら、房総の海も江戸の町も、一望  
であろうと思われる高輪の鶏坂に、久しくかかっていた疑問の  
建築が、やっと、この秋になって、九分九厘まで竣工した。

お茶屋でもなし、寺でもなし、下屋敷という造りでもない。  
一体、どんな大家族が住むのであろうと、下町では、話題にな  
っていたが、儲いよいよ、引越しの当日、ここへ移って来た  
ものは、瘦驅鶴にも似たる老人が、たった一人。

尤も、召使は、四五人ほど来たらしいけれど、荷物と言つて  
は、古びた書箱と机と、いと貧しい世帯道具が一車、ガタクラ  
と、その宏荘なる新屋敷へはいったのみである。

孤独な、老い先のない身で、こんな大きな建築をやつて、彼  
は一体、何が満足なのだろう。単なる、普請狂とも思われな  
い。

彼は毎日、家のまわりを、ひとりて逍遙して、独りでニヤニ  
ヤしていた。そういう時の彼の笑い顔は、実に柔和で、明る  
かがやきが溢れている。人の性格や境遇が、その時々によつ  
て、有の儘に人相にあらわれるものならば、彼は現在、よほど  
幸福であるにちがひなかった。

や が て 嫁

『おう！これや初客じゃ！ 富武五百之進殿が、初客にござ  
ったとは忝ない。——なに、花世さんも御一緒か、これはい  
よいよ欣しい』

『これ花世、何が恥しい、こちらへ参つて、ご挨拶を申さぬ  
か。——どうも、いつまでも、子供で困る』

『なに、子供どころか、貴公よりは、背丈が高い。それに、暫  
く見うけぬうちに、たいそう美人になったのう、あはははは。  
……何せい、よく訪ねてくれた。——ま、早速だが、見てくれ  
い、わしの建てたこの家を』

人恋しいのであろう、意外な訪問者を迎えて、老人の欣びか  
たは非常なものであった。

『……ほう、部屋数が二十七もあつては、たいへんだな。どう  
じゃ花世、広いものではないか、ウム……眺望もすばらしい』  
富武五百之進とは、誰も知る、番町の旗本、四十四五の年配  
で、見るからに、几帳面そんな人物。

いわゆる、御番衆というところ、いったいに、風儀の悪い方だ  
が、江戸城でも、書院詰のものだけは、悪風に染まず、品行が  
正しいといわれている。

わけても、五百之進などは、その代表的な人物で、学才もあ  
り、思想も健全で、私交上にも役目にも、曾つて曲がったこと  
がない。剛直、竹の節のような性格だった。

——に、ひきかえて、娘の花世は、女性的な上にも女性的  
な、媚やかな、可憐な、松の根に咲いた山桔梗にもたとえたい  
ほどに——深く、初々しい。

いいお娘だ。

誰も、この父と、この娘の、正しき、優しさが、上品な愛を  
醸しているのをながめて、褒めぬものはない。

鶉坂の老人は、五百之進とは、刎頸の交際があった。そし  
て、吾が子郁次郎の許嫁である花世を、ほんとの子みたいに可  
愛がッていた。

一巡すると、老人は又、わら草履をはいて、

『さ、こんどは、わしの住居を見てくれい』

と、二人を伴って、外へ出た。

やはりこの大きな建物は、老人の塙ではないらしい。彼は、  
先に立って、崖庭を歩き出した。暫く行くと、同じ向の崖に、  
これは又、ばかに小さな一つの御堂が立っていた。

『愛繩堂』

三井親和の贈った隷書の木額が、かかっている。

『……愛繩堂』

五百之進は、つぶやきながら、中をのぞいた。

堂の内部は、畳二十枚ほど敷ける。炉と、机と、書箱のほか、  
何も無いが、奥の方に、小さな棚が幾だんもあって、それに、  
種々な姿態をした木彫人形が、五百羅漢のように並んでいる。

僧形の雲水、結綿の娘、臍たけたる貴女、魔に似たる咒漢、  
遊女、博徒、不具者、覆面の武士、腕のない浪人、刺青のある  
百姓、虚無僧、乞食、鮎箱をかついだ男、等、等、等——一つ

一つ見てゆくとあらゆる階級の諸相諸悪のすがたをもった人間  
が、呼べば、答えそうに、うす暗い壁へ、無数の影を重ねてい  
る。

『ウーム、夥しい数だな』

『三十年のお役目は、ふり顧れば、一瞬間の間、自分でも、こん  
なに多かろうとは思わなかった』

『……怖ろしい！ 拙者はこれを見てみると、世の中が、怖く  
なる』

と、五百之進は、潔癖な眉をして、気味悪そうに、顔をそむ  
けた。

そこへ、下男の姿が見えた。一通の飛脚をもって、

『——老先生、長崎から、お手紙でござります』

『さあ、郁次郎から参ったか』

と、老人は、また一つの欣びを受取って、殆ど、その手紙  
へ涎を垂らさんばかりにホクホクしながら、

『ちようどよい折。五百之進殿、郁次郎からの頼りでござる』

『どれ、どれ』

と、五百之進も、顔を寄せて行ったが、花世は、校員のよう  
に耳を紅くして、父と老人が、低声で読む手紙の内容を、うっ



とりと、鼓動の胸へうけ容れていた。

## 前身

『いつ着くな、郁次郎殿は』

『この手紙では、九月の末——十月には相違なく帰るじやろう。帰府の上は、早速にも、婚儀をあげたいと思うているが、そちらの御都合は』

『師走ではいかがかと考えておる。——十二月、そして、新春を迎える』

『なるほど。郁次郎めも、こう早く帰府いたすというのは、一日千秋の思いで、一刻もはやく、花世さんの顔が見たいのじやろう』

聞かない振をして、空を見ていた花世は、火のようになって、父のうしろへ隠れた。

『ははは。恥しいことはない。郁次郎が帰れば、あの屋敷は、二人のもの。わしはこの草堂の主になって、仲のよい若夫婦を眺めて暮す。……それが唯一の希望じゃ。オオ、そういえば五百之進殿、お願いしておいた公辺へのお届けは』

『その事なら心配はない。御老中方も、趣旨を聞かれて、さすがは塙老人、殊勝である、すぐに御聴許になった』

『それで安心いたしました。公儀のお許しがすめば、もう世間へ知れてもよい』

『では、いざれ近日に、改めて、結納を持って出直して参る』

『左様か、では、婚儀の日どりは、その時の御相談としようか』  
五百之進は、花世を連れて帰った。

老人は、ふたりを送り出してから、大工に大きな檨の板を削らせ、それへ太筆に墨をふくませて、「塙蘭医養生所」と書いて、

『きょうは欣ばしい日だったせいか、ばかに、文字も気持ちがよく書けた』

と、愛繩堂の中に立てかけて、墨を乾かしておいた。

これで分った。鶉坂の大きな建物は、病人を容れる養生所になるのだ。幕府の施薬院としては、小石川養生所と青山に一個所あるが、それは、両方とも漢方医の病院、老人は、ここで本朝最初の蘭医の施療所をやろうという思い立ちらしい。

では、彼は医者かというに、否、否、否、たいへんな職業者がいだ。

この老人こそ、享和、文化、文政の三時代に互って、十手捕縄を把って三十年、目明し小頭の下役から、同心、与力と出世して、歴代の江戸町奉行をたすけ、その非凡な大眼識と巨腕は、近代稀れな鬼才と称された名探偵——塙隼人であった。

が、数年前に、その道を隠退してからは、好きな木彫や読書に耽けり、号を江漢漁史といって、外へ出るのも、書画会ぐらいなもの。

あの柔和な相、明るい笑い顔、その何処にも、彼がそんな鋭利な眼と才と腕とをもって、社会のあらゆる悪と戦って来た人とは見えない。

捕縄供養

四五日すると、富武五百之進が、正式に結納を持って来た。婚儀は、十二月ときまる。

江漢老人と五百之進とは、心と心をゆるし合つた莫逆の友。その子と娘とは、稚い頃から親の目にもわかつていた初恋の仲——。何も改めて、仲人も要るまい——で、事は至って簡略にすすんで、もう郁次郎の帰りを待つばかり。

『きょうで、五日経つた、もう長崎をだいたい離れた頃だろう』  
老人は、指ばかり繰っている。

『彼も、出島の蘭医館へ遊学にやつてから、まる五年、二十七歳になる。手紙を見ても、学業はすすんだようだ。——わしは生涯、十手捕縄をつかんで、悪党とはいへ、数百名の人間を獄門へ送つて来たから、倅には、世人を救う仕事をさせたいと考へて、医学を習はせ、自分が多年のあいだの蓄積と、諸家から礼に贈られた金とをあわせて、貧者や、出牢しても寄るべのない病人などを救う施療所を建て、それを新しい若夫婦にまかせて、わしは愛繩堂で、余生を自適するつもり……。ああ、はやくそうなりたいたいものだ。そうなれば、初めて自分は、生涯の重荷が下りた気がするだろう』

彼は、希望に盈たされていた。  
と、そのうちに——『江漢老先生が、御息が長崎の遊学を

終えて帰ると共に、貧者のために、蘭医養生所をひらくそうだと、その噂が、ぱつとひろがった。

何しろ、あらゆる方面に顔はひろい。隠退してから七八年になるが、いまだに町奉行所でも、何か重大な難事件に行き悩むと、老先生を訪ねて、探索の方針について教えを乞うのが常だった。それが、神眼で指すようにいつもキツバリと謎の核心をつかむ。——それ位であるから、江漢の名声は、まだ少しも落ちてはいない。

毎日、鶉坂へは、たいへんな贈り物が来る。

江漢老人は、大迷惑な顔で、

『わしは、今日まで、殺生をした罪ほろぼしに、これからは、倅と共に、人だすけをやるつもりじゃ。それを、人様迷惑になつては、大いに困る』

と、怒らんばかりに断つたが、次々にやつて来ては、怒りきれない。忽ち、養生所の家具一切から、庭、門、垣根まで、寄附で出来てしまった。

『あの、愛繩堂とは、どういうわけですか』

と、来る客は皆、必ず、その木額の意味と、奥の変な木彫人形の由来をたずねた。

老人は、きまつて、こう話した。

『——十手捕縄をもつ人間は、鬼のごとく無慈悲なものと思われていたが、人間皆悪、人間皆善、情涙には誰も変りはない』  
『成程、そういうものでしょうか』

『で——わしは、ひとりの罪人を獄門へ送ると、必ず、一つの木像を彫つて、朝と夕に、供養しておつた。——それが三十年

のあいだなので、いつのまにやら、あんな数になつたんじや」  
世間は、奇を好む。

この話が伝わると、誰が発起ともなく、養生所の新築披露目をかねて、一つ、稀有な大与力の隠退を記念する捕繩供養をやるうではないか——イヤ、やらせようではないか、と他から騒ぎだした。

席は、愛繩堂で、あの悪像を回向し、その後で酒もよし、三味もよし、席画もよし。

老人に指導をうけた八丁堀の若手や、難事件に堕ちて手にかかった人々などが、相談をまとめてから、この話を、鞆坂へ持ちこんだ。

『なんじや、捕繩供養とは？』

『前例のないことですが、老先生のようなお方も、前後に珍しいことですから』

『で、どんな事をするというのか』

『こちらの愛繩堂を拝借して、名月の夜に、心ある者が集り、あの老先生の手彫の悪霊どもを供養しまして、序ながら、御隠退を惜みたいと存じますので』

『でも、わしはもう、とうにお役退きをしておるんじや』

『けれど、世間では、こんどの御普請で、初めて老先生のお覚悟をはっきりと知ったのですから、古いお馴染がいに、一夕ぐらい、ゆるゆると、お膝を台せて語りたいと熱望しております』

『そうか。……じゃ皆のよいように、やって貰おう』

拒みかねて、老人も遂に、任した。  
やがて、案内状は、知人の間へ配られる。そして間もなく、

捕繩供養のその日が来た。

仲秋の名月——八月十五夜。

実にいい月であった。盛会であった。

然し、この晩！ ああこの晩！

彼が、塙隼人の若い時代から、多年の間、十手にかけて、捕繩にかけて、獄門台へ罪人を送ることに、一体、二体と刻んで来た無数の手彫の悪像どもが、こぞって祟りを初めたのだからか、これから愛の余生にはいろうとする老先生をして、三十年の体験にもなかつた苦闘の熱地に立たせ、塙家の幸福を、暴風的に覆えがした大悪魔は、この夜、皎々と冴えた名月の巷に、初めて、ひょいと顔を出したのであった。

### 三 本 錐

『いい十五夜だなあ、昼のようだ』

『オイオイ波越』

『なんだ、加山』

『月にばかり見惚れていないで、少し急ごうじゃないか。公用で少し遅刻したが、吾々は、今夜の世話人の中にはっているんだ』

『そうだ、こん夜の捕繩供養は、老先生が生涯に一度の思い出だ。おれも責様も、老先生には、訓育の御恩をうけている師弟のあいだ。それが遅く参っては、参会者も不都合な奴と怒って

おるかも知れん。早く参ろう。」

南町奉行所の同心、波越八弥と、加山耀蔵の二人だった。どつちも元気がいい、鋭敏な眼ざしをもち、若手として、働きざかりである。

土橋を渡ってから、ふたりの影は足早になった。大股を争うように急いだ。四ツ辻へ来ると、其の町口から、左の方に月の海が光って見えた。

やがて、その息で、増上寺の山内へはいった。

ひろい御成道は、白と黒の寂地だった。白は月、黒は巨木の影、その中を急いでゆくと、顔にも肩にも、袴にも、ちらちらと、海月のような光線がたかって、後へ飛んで行く。

『しッ……耀蔵』

釘を踏んづけたように、ぎくと足をどめて、

『待てよ、ちょッと』

『何うした?』

『あれに、妙な奴が竹立んんでいる。……今、ホウ、ホウ、と口笛を吹いた』

『いや、そう聞えたのは、鼻だろう』

『そうか、然し、怪しい風態じゃないか。……オヤ此方へ来た』

蟋蟀のように、カサリと、草の中にかがみ込んでみると、静に、雪駄を摺る足音が近づいて来る。

夜目にも色の白い侍だ。が、惜いことに、その白さは目と鼻のあいだがちらりと見えるだけで、眉深に頭巾に隠されている。服装も黒ずくめで、刀の鐙が羽織の裾を蝙蝠のつばさのよ

うにびんとさせていた。

静に——チャラリ、チャラリ、と眼の前を通り過ぎて行く。

『なんのこった、山猫を素見して帰る御家人か、どこぞの次男坊じゃないか』

二人は、草の中で、黙笑を見合ったが、すぐに飛び出すわけにも行かないので、聲音をやりすごしていると、又一つ、御霊廟のうしろの方から黒い人影が来るのを見た。

月の斑が、チラチラと視覚を紛らわして、はつきりと判らないが、脚絆手甲をかけている百姓態の大男だった。背中に、何やら重そうな物を背負いこみ、手には、杖みたいなものをついて、ずんぐりした体を屈み加減にして、歩いて来る。

『や、あいつ、御霊廟のうしろから出て来たぞ』

『あの裏は、往来でない筈だが』

『鎧櫃を背負っているじゃないか』

『ウム……おやっ? ……こいつあ、臭い』

二人の六感は、何ということもなく一致した。近づくの待って、ばらっと、露を蹴って躍り出すが早い、左右から打つかるように駈け寄って、

『待てッ』

『何処へ参る!』

と、右の腕、左の腕、両方からグイと捻じ上げた。

『? ……』

男は、呆っ氣にとられた顔をして、目や、鼻や、口を、異様に動かしたが、うんともすんとも言わなかった。

そして肩越しに、団栗のような大きな白眼を、ギョロリと後

ろへ送っているもので、波越八弥が、はッとその視線を辿ると、先へ行った黒ずくめの服装をした侍が、足をとめてぎょッとしたように此方を振り顧っていた。

『おッ——あいつの連れだ!』

八弥が、そう気がついて、駆け出そうとした途端に、侍の影は、唐門通の真っ白な月下を、夜鳥のように、躍りながら、右の手をひるがえして、何か投げた。

『わっ』

眩々として、八弥は、思わず自分のこめかみを抑えたまま、踏めた。——風を切つて来た小石は、彼の頭から匆ね返つて、地上へ小さい音を転がせた。

すると、同時に、鎧櫃を背負つたまま利き腕を捻じ上げられている百姓男は、耀蔵の手を振り放つて、猛然と、杖みたいな棒を、横に構えた。

『耀蔵、油断するな! そいつは、三本鎗だぞ』

八弥は、こう怒鳴つて、注意せざるを得なかった。杖の先には、鋭い三つ股の錐がついている。それを横に構えて、ぶんと投げるか、突っかかって来るつもりか、男の眼は、殺気に燃えあがっているのだった。

## 謎の櫃

と、加山耀蔵は、八弥の注意を聞きながしながら、敢然と、男の手もとへ飛びこんだ。

——男は、野獣のように、体を屈曲して、三本鎗を自由自在に使い出した。それは棒にもなり、槍にもなり、どうかすると、手を離れて飛んで来そうにもなる。

こんな奴に、十手を翳すのは大人げない、というような気もしたが、耀蔵は遂に、武器を持たずには居られなくなった。無論、八弥も側面から力をあわせて、息もつかせずに、挑みかかったが、男は容易に屈伏しない。

いや、却つて二人の方が、屢々、三本鎗に見舞われて、どこともなく、血まみれになつてしまつた。

そのうちに、男の運の尽だつたことには、背負っている鎧櫃の片紐が切れたため、それが、ずるんと背中を這つた途端に、仰向けに足を浮かしたのである。しめた! と耀蔵はその浮き腰を蹴とばした。八弥の十手は、男の頬骨をイヤというほど撲りつけた。

よほど強情な人間とみえて、それでも男は、わつとも、すつとも言わなかつた。二人は呼吸を弾ませながら、男をがんじ絡めに縛り上げておいて、番屋の者をよび、鎧櫃と三本鎗をかつかせて、急いで、一たん奉行所へ引つ返した。

そしてすぐに、報告だけをしておいて、二人はまた捕縄供養の席へ、出直すつもりだったが、短い道のりを、駕で飛ばしている間に、耀蔵は頭がふらふらとして来るし、八弥は、薄黒く褪せた唇を噛みしめて、意識さえ、あやしくなる。

奉行所の医者に、熱い薬湯の茶碗を手持たせられて、喉を

『生意気な!』

焼かれるように感じた時、ハッと気がついてみると、八弥は自分の体も、側にいる耀蔵も、白い布に巻かれて、蘇鉄のようになってのを見た。駕にのるまで、さほどに感じなかった三本錐の傷が、腕や股に、ずきずきと激痛の脈を搏つ。

『気がついたか』

前を仰ぐと、吟味所の床に、奉行と与力がいる、書記が机をひかえている。獄吏が六尺をかかえこんで取り巻いている。

——そして、鎧櫃と、三本錐の兇器を、怨めしげに睨みながら、百姓男は、棒立ちに、立っていた。

『どうじゃ、兩名、苦しいのか』

『いえ、なんの、面目ない儀です、不覚を仕りました』

『不覚どころではない、これや、案外な大罪人かも知れぬぞ。暫時傷手をこらえて、召捕った時の模様を、話して聞かせい』

時の江戸町奉行は、榊原主計頭。

その晩の立会与力は、東儀三郎兵衛、奉行所中の上席であつた。

二人の申し立てが終ると、奉行はうなずいた。係りは、東儀与力の手にうつる。

捕われて来た百姓男は、よく、田舎から江戸へ出て来る黒焼売のような泥くさい風態をしている。

『おいッ、坐れ！』

東儀与力の吟味の峻烈さは有名なものである。いきなり、雷声を発して、光りを放射する窓のような眼をもって、男を睨んだ。

『ひかえろ！』

割竹が唸る。

獄吏が叱りとばす。

だが、男は、ぼかんとした儘、無感覚であつた。そして、両方の手で、耳を引ッ張つてみせた。妙な、張合抜けが、瞬間ではあつたが、吟味所を白けさせた。

『これや、一筋縄で恐れる曲者じゃない。お奉行、あれに口を開かせるには、だいぶ時刻がかかります。てまえに、お任せ下さいませうか。……では其奴を、ひとまず、湯灌させておきますが』

湯灌とは、何の意味か、奉行がうなずくと、獄吏たちは、男を拉して、暗い棟と棟とが重なつた獄舎の露地へ引つ立てて行つた。

と——すぐに、東儀与力は、眼くばせをして、鎧櫃のそばへ寄つた。八弥と耀蔵とは、苦痛をこらえながら、燭を持った。

『怪しいのはこれだ。……ウーム、かなり重い、どこかの武家屋敷から盗み出した贓品だな。や、入念に、定紋まで削り落してある』

錠前を打ち壊して、ほんと、蓋をあけた。

『あつ？』

とたんに、誰もが、思わず面を反向けた。

死しに  
笑え  
鬻くほ

鏡櫃やうびつの中からは、むうっと、霧霧のような血腥ちまぎいものが立つて、かざしている蠟燭ろうそくの灯ひかりが、墨すみのように、またたいた。  
『死骸しがいだ！』

『——女おんなじゃないか』

白い仮面めんのような女の顔——バラリと黒髪くろかみがかかかって、廉越れんごつしの月つきのように、やわらかい統とと長襦袢ながじゆばんの中に埋うめまっている。その髪の毛を、掻かきよせてみると、何うだろう、白蠟はくろうみたいな女の頬ほおは、ニッと、笑鬻えくほが泛うかんでいるのだ、如何いかにも、死しを満足まんじつしているように——。しかも、まだ死しんでから幾時間いくじかんも経へつてはいない。口紅くちびるの色いろさえ、光あかりっている。

東儀とうぎ争力せうりきは、手をさし込んだ。引き摺ひきずり出してみると、あ、やっぱり駄目だめだ！女の体ていは、鼓つづみのように、細紐ほひもで巻まき締とめてあって、左の乳ちちの下したに、鮫柄さめがらの短刀たんとうが、根ねまで突き貫くして、抜ひかずにある。

簪かんざし、櫛くしの紋もん、はこそこ、帯留おびどめ、何か手てがかりとなる一品いっぴんでもないかと検しらめてみたが、装身具まけしんぐは、すべて捲むり取とってあって、素性すじょうを暗示あんしするものは、一点もない。

笑わら 鬻くほ  
一つ、短刀たんとうであるが、それは道具屋どうぐやにでも、さらに転まがっているような物もので、何なにらの特徴とくとうもなかった。ただ——幾度いくど見みても、つくづく嘆息たんそくの禁いじ得えないのは、女おんなの美貌びようなことである、

死顔しがんとはいえ、実に美しい、肌肌といい、眉目まゆめといい、麗玉れいぎよくのようだ、もし、これで生きていたら——と、思わずにいられない。奉行べいぎやうは、ここで退席たいせきした。

そして、この事件じけんの専役せんやくを東儀争力とうぎせうりきに命いのちじた。同時に、八弥やちと耀藏やうざうも、力を協あせて、一日いちにちもはやく下手人げしよにんを召捕あらるるように言い渡わたされた。

『幾歳いくさいだろう、女おんなは』

東儀争力とうぎせうりきは、腰こしをすえて、考えこんだ。

『十九じゅうきゅうか、二十歳にじゅうさいぐらいに見えますが』

『ウム、おれもその辺へだに見当けんあをつけているが、身分みぶんは、何者なにものだろう』

『さあ、髪かみはこわしてあるし、帯おビはないし、当りがつきませぬが、唯ただどこか上品じゆんぴんな面影おもかげがあるように見みうけますが』

『いかに、公卿くわうけいの娘むすめといつても、恥はしくない』

『ことによると、どこか御大身ごたいしんの方かたの寵妾ちゆうせつではないでしょうか』

『鏡櫃やうびつに入れてかつぎ出だされた点てんからみても、武家屋敷ぶけあやしきだといふ推量すいりやうはつく』

『然しかし、どうして、女の死顔しがんが笑わらっているのでしょうか』

『眠ねっている所ところを、一突ひとつきに、刺さし殺ころされたものと思う。——情痴じやうちの遺恨いこんだな、これは』

『お説せつに同感どうかんです。けれど、ここに不審ふしんがあります』

『何か』

『死骸しがいの左ひだりの手てを検しらめてみると、人差指ひとさしゆびが一本切ひとぽんきりり取とってあります』

『情痴の下手人が、持ち去ったものだろう』

『それならば、髪の毛とか、小指とかを、切りそうなものが』

『いや、争う場合に、切り落とされるという例もまああるから、その指は、あまり証にはならぬ。もっと重要なことは、女の髪の毛の匂いだ。——江戸の女は、上つ方で、伽羅油、町方では井筒か松金油と限っている』

『なるほど、少し、薫りが違いますな』

『その匂いは、長崎土産の薔薇香という舶載油にちがいない。まだある、その長襦袢の様子は、唐人船ではないか。してみると、この女の情人か、主かは、長崎の方に知行所を持つ武家か、縁のある男と見て、大体、間違いはあるまい』

『それだけ伺えば、だいぶ目星がつけ易くなりました。兩名して、きつと女の素性を洗って参ります』

『いや、その手傷じゃ、二三日は無理だろう。充分に加療して、それから働いてもらいたい』

翌日、東儀与力は、引っかかりの仕事をすべて他の者に受けつけて、役室で、一ぷく吸いながら、

『おい、ゆうべの男は、何かしているか、ちょっと覗いて来』

と、獄吏に言いつけた。

獄吏は、すぐに戻って来て——

『呆れた奴です、寝ております』

『なに、寝ている』

『正体なく、軒をかいておるので』

『よし！』

彼は、煙管をぶっといわせて、首斬場へのぞむ時のように、硬ばった顔をして出て行った。

## 生壁問答

蟋蟀、みみず、陰湿な虫が昏間でもチチと啼いている半露地をぬけると、塀際の隅に、低い、石倉がある。

そこには人間の、悲鳴や呻きを作る機械——血や肉をしぼる拷問道具の、あらゆる種類の物がいっている。一通りの強情者は、一晚泊らせられれば、参ってしまう。

それを獄吏のことで、湯灌をするというらしい。——所が、東儀与力の耳には、近づくに従って、象のような軒が聞えた。

『起きろ！ おいッ』

彼は、石貫道具の台のうえに腰を下ろした。中はうす暗く、小窓一つしか無い。妙な木製車のついている柱には、血汐の斑痕がありありと分るし、大きな銅鍋には、硫黄色の鉛が蚯蚓のようにこびりついている。

『こらっ、起きないかッ』

肩に足をかけて、ぐりぐりと小突くと、男は、けろりと見上げて、東儀与力と同じように、拷問道具へ腰を下ろした。

——墓のように口をむすんでいる。



まったく不解な男だ。古沼からひきずり出した山椒の魚の化物みたいな人間だ。神経の反射とか、感覚とかいうものがまるで無い。

（この野郎、拙者を呑んでかかっているな。面白い、啞にもなれ、聾にも化けろ、おれも南町奉行所に彼有りといわれた東儀三郎兵衛だぞ）

肚にたたみながら、暫く、睨みくらべの形である。

『これ、町人。貴様は手足の皮があつい所を見ると、田舎者に相違ないが、どこの国の者だ。黒焼売か、百姓か』

『……………』

轟然とした口は、相変らず、への字の儘である。

『ゆうべの錯櫃には、何がはいっていたか、知っているだろうな』

男は、眼と鼻をクシャクシャと歪めて、両方の腕を天井へ上げた。喉仏の見えるような大きな口から、欠伸が出た。

東儀与力は、焦々する忿怒を抑えて、

『おい大将、啞聾のまねなんざあもう古手だぞ。この石倉の道の道具は何に使用するものか知ってるだろう。そんな無駄な世話を焼かすもんじゃない。奉行所で貴様を下手人と睨めば、なにも、こんな生ぬるい吟味をしてはいない。下手人のホシは他についているのだが、然し漫然と放免は出来ぬから、役目の手前として、一通りだけのことを訊ねるのだ。はやく済まして、貴様も今夜は、女房のそばへ帰って、晩酌でもやった方がいいじゃないか』

『……………』

『どうしても、口を開かん！ いつまで猫を被っていると、為にならんぞ！』

『……………』

彼の顔いろに、男は少し硬直した。

（こいつ、本物かしら？）——そう思わざるを得なかった。それじゃ、啞として対話しない以上は、通じる理はない。

彼は、紙と矢立を出して、筆談を試みようとしたが、全然、盲目だ。冗戯を書いてみせても、笑いもしない。

こんどは、手や、指や、顔の表情で、いろいろに問いかけた。白洲に啞聾をひき出す場合も稀にはあるので、啞の手話には馴れている彼であったが、この男には、それすら通じなかった。いや、通じない顔をしているのかも知れない。まるで生壁へものを言っているようだ。

彼は、煙草を吸うと見せて、いきなり、そばに隠しておいた短銃をつかみ、轟然と一發天井へ向けて放した。

『あっ！』

と、初めて吃驚したような声を聞いた。

『ごまを見ろ！ 偽聾！』

彼は、自分の機智に凱歌をあげた。

男には、耳がある、声が出る。